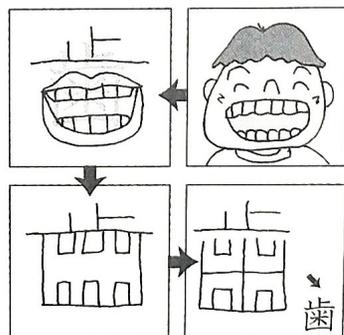




これが漢字カ・国語カ大幅アップの実戦法

漢字ざらいから読書大好きの子供に



漢字学習で小学生の学力がみるみるアップ

一章でも述べましたが、国語教育の現場で行われている「ひらがな先習」「漢字の読み書き同時学習」「交ぜ書き表記」などにより、漢字嫌いの子供が増えています。こうした不合理を憂慮し、私の提唱する「石井式漢字教育法」に関心を示し、賛同してくれる教育者も増えつつあります。

次に紹介する土屋秀宇氏は、小学校の校長であるとともに、「日本漢字教育振興協会」事務局長でもあります。果敢に小学校の教育現場に「漢字読み先習」を導入し、すばらしい成果をあげておられます。その小学校は、平成六年には「第四十三回読売教育賞」の国語部門で優秀賞を受賞しています。

漢字ぎらいの子供たちに自発的な学習態度が芽生える

船橋市立行田西小学校校長 土屋秀宇氏

私は学生時代に、大脳生理学の第一人者である時実利彦先生の書かれた本を読んだのをきっかけに、脳の働きと教育の関係について考えるようになりました。大脳生理学からいうと、人間は三歳ぐらいまでがもともと記憶力に優れ、六歳ぐらいまでは、丸暗記や“直感把握”を得意とする右脳の優位がつづくことがわかっています。

その後もこの状態はつづきますが、その一方で論理的な思考を得意とする左脳の働きも徐々に高まってきます。そして九歳ぐらいからは、左脳が優位に働くようになります。

こうした脳の働きに基づいて、教える時期と内容と方法を考えることが、教育効果をあげる最善の方法といえるわけです。特に言葉の力を身に付けるうえで大切な漢

字教育を考えますと、漢字を与えるのは、幼児期から八歳ぐらいまでの時期（小学低学年）が最適ということになります。

言葉を司るのは左脳といわれますが、漢字は例外で、左脳だけでなく右脳にも入っている、「絵で見る言葉」というような感覚で受け入れることができるのです。実際、右脳が強く働いている時期の子供に漢字を与えると、本当によく覚えてくれます。〇歳や一歳の子供でさえ、漢字を教えると、簡単に覚えてしまうほどです。

「石井式漢字教育」はまさしく、この右脳の優位な時期をとらえた漢字教育法で、つねづね、深い共感をもっていました。というのも、私は学生時代から、国語国字問題に関心があり、「国語問題協議會」の会員でもあって、漢字にはとても大きな関心を寄せていたのです。

ところで、私は平成二年、それまでの長きにわたる中学校の英語教師から小学校

校長（船橋市立法典東小学校）に就任しました。そしてそれを機に、石井式漢字教育を実践したいと思いました。国語教育にかかわるチャンスが巡ってきて、大いに張り切っていました。

まずは、現場の先生方の理解と同意を得ることから始めなければなりません。先に述べたような大脳生理学からの説得はもちろん、小学校低学年ぐちいまでの子供のいる先生には、家庭で試してもらい、「子供にとって、漢字を覚えるのはやさしい」ことを実感してもらうようにしました。そのかいあって、赴任して三年目の平成四年度から、全校をあげて、漢字教育に力を入れて取り組むことになったのです。

この平成四年度はちょうど、十年ごとに見直される、文部省の学習指導要領が改められる年度に当たり、漢字教育に拍車がかかることになりました。

というのは、国語科における漢字の扱い方に改訂があり、従来は学年ごとに配当漢

字のみを指導することになっていたのが、このときからは、該当の学年より上の学年に配当された漢字および配当外の漢字についても、ふりがなをつければ必要に応じて提示できるようにしたのです。

これは、現場教師に対し、漢字教育の弾力的運用と創意工夫が求められていることにほかならず、その意味でも、タイミングのよいスタートとなりました。

具体的な試みとしては、①読み先習、②解字指導、③名文の朗読・朗唱を三本柱としました。その一つひとつについて、もう少し詳しく紹介してみましよう。

①読み先習の試みについて

漢字が読めるようになることを目的に、教室などの掲示にはできるだけ漢字をたくさん使うようにしたり、国語の教科書のひらがな表記の上に漢字を貼りつけた

り、また他教科でも漢字で示したほうが効果的と思われる語は漢字で教えたりと工夫しました。

また、入学当初から、生徒の氏名は漢字を使用しました。生徒の氏名を漢字カードにし、それを見せながら名前を呼ぶようにしたのです。すると、一年生が二日間で四十人中三十人、自分の名前の漢字表記がわかり、呼ばれる前に手を挙げました。三日目では三十七人が、四日目には全員がわかるようになったのです。しかも、自分以外の生徒の名前もいつの間にか覚えて、その漢字カードを読めるようになっていたのです。

また、学校名をはじめ、日課表、曜日、掃除や給食の当番表、校歌など、漢字で書くことが常識とされている語は、最初から漢字で掲示しました。毎日くり返して使う言葉だけに、まったく抵抗がありませんでした。

「窓」「机」「時計」「壁」「黒板」などの漢字は紙に書いて、それぞれの対象物の横に貼りましたが、ときどき、「これ、何て読むの？」と刺激を与えると、そうしなかった場合と比べて、定着率に差がつくことが明らかになりました。

国語教科書のひらがな表示に漢字を貼るのは、漢字にしたほうが理解しやすいものの、交ぜ書きにされているもの、生活に密着しているもの、登場する頻度の多いものなどを対象としました。

低学年では、「しょう火」を「消火」と直し、「火を消す」という意味だと説明すると、「消防車が水で火を消すんだよね」といった発言が出たり、貼った漢字が他教科の学習に出てくると、「あるとき、あそこに出ていたよ」とよく覚えていて喜んだり、教師がひらがなで書くと、「漢字で直せるよ」と反応したり、ともかく、単に教えられるだけの受け身ではなく、自ら学ぶ姿勢を示すようになるのが嬉しい驚きでした。

また、高学年でもアンケートを取ると、全校の八二%が“貼り漢字”を好きと返答しました。そして、漢字を貼るという作業が終了したときには、すでに自然にすらすら音読ができるようになっていくという効果があったのです。

他教科でも、漢字で示したほうが理解を助け、効果的と思われる語が少なくないのです。たとえば、算数です。「△」の形は、「さんかけい」と教えても、形と言葉が結びつきにくいのですが、「三角形」と漢字で表すと、「三つの角がある形」であるとすぐに理解できます。音楽でも、「にぶおんぶ」「しぶおんぶ」とひらがなで教えるよりも、全音符を二つに分けたものが「二分音符」、四つに分けたものが「四分音符」と音符を図示しながら示すと容易に理解できます。

このように、あらゆる教科において、ひらがな中心のときと比べて、漢字で教えることにより、生徒の理解と意欲が格段に違うことが実感できました。

② 解字指導の試みについて

漢字の多くは、“部首”という部品を組み合わせることでできてきたものです。したがって、部首のもつ意味や性格をしっかりとつかみ、それを土台にして体系的に学習していくならば、理解が容易になるとともに、しっかりと記憶に刻まれる効果が期待できます。

部首の意味や性格に着目し、象形・指事・会意・形声といった、その成り立ちから漢字をとらえる解字学習に対して、全校生徒の九五％が好きと意思表示しました。その理由としては、知る喜びや感動があること、意味がよくわかること、系統的な学習ができること、新しい漢字も推理できることなどが考えられます。

実際、低学年であっても、「煙」「燃」「炭」などにはどれにも「火」があること、また「涙」「海」「波」「泣く」などには「氵(水)」があることを取りあげて、漢字には意味があ

ることを教えると、生徒からは「面白い！」の大合唱が起ります。

そうこうするうち、新しい漢字を教えようとするとう度は、「先生、教えないで」の声があがり、自分で考えることを楽しむようになります。つまり、想像力や類推力の育成に大きな効果をもたらしていると考えられます。

さらに、一年生であっても、“漢字の成り立ちがわかる辞典”を進んで調べるようになり、わかる喜びが新たな学習意欲を引き出すことにつながっていくことを知ったのも、すばらしい発見でした。

③ 名文の朗読・朗唱の試みについて

漢字に親しむ方法として、表現力、作文力、語彙の宝庫である古典を読むようにしました。漢詩や和歌、俳句、定型詩、漢字の絵本(低学年)、国語読本(高学年)など、

学年で何をやるかを相談し、「帰りの会」などの時間を使って、毎日短時間実践したのです。

子供たちはこの時間が大好きで、教師が、「今日は時間がないから、中止しよう」などと言おうものなら、「ダメ！」とブーイングが起こるというありさまでした。子供たちははなかでも文語文を好みましたが、これは、文語特有のリズムと音の響き、そして緊張感が心地よいくらいに違いありません。

一年生のあるクラスで、教師が一枚の模造紙に漢詩一編を句読点や訓点をつけず白文で書いて、最初に文字を指差しながら模範読みを行い、次に生徒たちが声を出して唱えるというふうにして、漢詩の朗唱を行いました。すると、一回目の放課後に早くも、「覚えたから聞いてほしい」と決まってやって来る子が三人いました。実際、この子供たちは正確に覚えていました。

そこでたいへん興味深かったのは、三人のうち二人は全教科五段階評定で「5」を取る優秀な子でしたが、もう一人は主要四教科は「1」を取る子でした。その生徒が、漢詩をすぐに覚えてしまうものですから、教師も驚いていました。漢字（11絵で見る文字）とリズムと音の響きに、その答えがあるのでしょうか。つまり、この年齢の子は右脳の働きのほうが優位ですから、右脳が得意とする絵や音楽から成る漢詩の朗唱は楽しくマスターできるのだと考えられます。

ところで、成績が下位ということはどちらかというと、論理や分析を担当する左脳の働きが弱いということです。ここで注目すべきは、漢詩の朗唱で自信をつけることで、学習意欲が高まり、学習することで左脳の働きも強化されるようになり、学力のアップに効果が見られるようになることです。

また、これも一年生のクラスで、杜甫の「絶句」を取りあげ、このときは、映像化の度

合いと理解度を見たいと思ひ、詩の意味はあえて教えず、意味のわかるとこだけ話させてみたことがあります。

絶句 杜甫

江碧鳥道白 山青花欲然

今春看又過 何日是歸年

こうみどりにしてとりいよいよしろく

やまあおくしてはなもえんとほつす

こんしゅんみすみすまたすぐ

いずれのひかこれきねん

(川に白鳥が浮かんでいるが、水が碧色あわなので白鳥が一層白く見える。山には赤い

花が咲いているが、山が緑色なので赤い花が燃えんばかりに赤く見える。このように美しい景色も春とともに過ぎようとしているが、この春には故郷に帰ろうと思っていたのである。この分ではいつ帰れることやら)

児童A 山が青くて、花がまるで燃えているようだ

児童B 山が青くて、鳥がとても白くてきれいだ

児童C 「何日」は、いつかまたって意味かなあ

児童D 花の色は紅いと思うよ。だって、「燃える」って書いてあるもの

児童E わかった。山が緑色で、その中に紅い花が咲いているのが、まるで火が燃えているようなんだ

児童F じゃあ、鳥もそうだね。緑と白できれいだね、先生

「江」を「山」と勘違いしているので、「シ(さんずい)」に目を向けさせ、そのあとで詩全体の意味を教えると、「当たった！当たった！」と大騒ぎでした。それにつけても、まだ七歳の子供でも、こんな思考ができることに感動させられたものです。

なお、一年生全員に県の標準学力検査を受けさせてみたところ、左上のように、標準よりはるかに高い得点が出ました。しかも、国語のみならず算数にまで注目すべき結果が出ました。こうして漢字教育により、確かに学力もついていたことがわかります。

算数	国語	
83	79	学年平均点
73	64	県平均点

以下、漢字教育の成果をまとめてみます。

- 漢字に対する理解の確さと定着の度合いが著しい(聴覚と視覚の一体化の効果)
- 論理的思考力、直感力、想像力、類推力、分析力、構成力などの伸びが著しい
- 言葉への興味・関心が強まる
- 知的好奇心が満たされ、学習意欲が向上
- 読書量が増加
- 学力が向上

この船橋市立法典東小学校での漢字学習への取り組みは、私の転任後もつづけられ、平成六年には、第四十三回読売教育賞の国語部門で優秀賞を受賞しています。

ところで、私は、自閉症の子供や知的障害児の教育に漢字を取り入れて、そこでも、大きな成果をあげた経験をもっています。こうした障害をもつ子供たちの多くは、左

脳の働きの弱っているために言葉の遅れをもっています。その点、漢字は左脳のみならず、右脳にも入っていくため、彼らにも受け入れやすいといえます。それどころか、左脳が弱っている分を補おうとして右脳が一生懸命働いたためか、漢字を教えると、普通学級の子供と同じように覚えてくれるのです。私は、そのことを、S君という自閉症の子供を通して、はっきりと教えられました。

S君は授業中、教室の机にじっと座っていることができず、廊下に出ては、ぐるぐると左回りをつづけているといった子供でした。そんなS君を校長の私が引き取って指導することにしました。S君には一つだけ、関心をもっているものがありました。それは、乗り物でした。それで、私はいつも画用紙を用意して、絵を描かせました。すると決まって、電車を二つ描きます。一つは黄色の電車で、あるとき、「これ、総武線で、東京に行くんでしょ」と聞くとうなづくので、電車のそばに「東京」と漢字で書いてあげました。もう一つは新幹線で、そこには「新幹線」と漢字で書いてあげました。そのとき、S君が本当に嬉しそうにニコツと笑ったのが、昨日のことのように思い出されます。

翌日また、画用紙を渡すと、同じように電車を描くものの、黄色の電車には「東京」らしい文字が、もう一つには「新幹線」らしい文字が添えてあるではないですか。これを生かさない手はないとひらめきました。

夏休み前に、S君のお母さんを校長室に呼んで、「漢字を書いたカードを作って、夏休みの間、一日五分間でいいので、真ちゃんとお母さんとお父さんで言葉の遊びをしてみてください」とアドバイスしました。四十日あれば、四十の言葉が増える勘定になります。

二期が始まると、S君は束ねたカードを持って、校長室にやって来ました。カードを数えると実に、二百枚近くありました。お母さんが言うには、始めは一日一枚のつ

もりが、あまりに反応がいいので、どんどんやっていくうちにここまで数が増えたというのです。これは凄いなと思ひ、すかさず、「S君、これ、読んでみてくれるかな」というと、「うん、いいよ」と。これが初めて、S君の口から出る言葉を聞いたときでした。そして、二百枚近いカードをすべて、読むことができたのです。それから、驚きの連続でした。「S君が皆といっしょに体育の時間に駆け足をやった」「S君が授業中に教室に入れた」「S君が教室に入って、椅子に座った」「S君が授業中ずっと、椅子に座れるようになった」、ついには「S君が教科書を開いた」というようにどんどん変わっていったのです。

あるとき、担任から、S君の連絡帳を見せました。家で、S君がお父さんとお風呂呂に入っていたとき、「学校で勉強、頑張るからね」と言ったということです。父親は思わずS君を抱き締めて、「頑張れよ」と励ましたそうです。そして、その夜は夫婦で手を取り合って、「よかったね」と喜んだと書かれていました。

S君はこの春、高等学校を卒業して、ときどき、手紙をくれます。先天的な脳の傷は残ったままですから、自閉症自体が治癒したわけではないのですが、それを補うにあまりあるくらいの語彙が増えたことで、S君の生活が変わったといえます。これはひとえに、漢字の力、言葉の力だと、私は思っています。

「漢字」は樹でたとえれば、根に該当し、「根を養えば樹は自らよく育つ」の道理で、漢字の力を強めることにより、幹である国語力は増大し、知・情意という枝葉を繁らせることもできるといふものです。

漢字に強くなれば、文字に対する興味や関心を高め、語彙を増やすことになるので、総合的な国語力はもとより、理解力や思考力、表現力などを向上させます。また、活字に対する抵抗も少なくなり、読書にも意欲的に取り組むようになります。

その結果、昨今の子供たちの問題点になっている「国語嫌い」「表現力の低下」「読書離

れ」などの根本的な解決にもつながるのです。さらに他人の力を借りて飛ぶグライダー飛行機ではなく、自らの力で飛び立つジェットエンジン飛行機のような、前向きで意欲的で自律した精神を育てることになるのです。

それだけに、家庭でも学校でも、漢字が受け入れやすい右脳が優位な時期をしっかりと見据え、漢字は興味あるもの、楽しいもの、わかりやすいものにとらえられやすい漢字学習を充実させてあげてほしいのです。漢字をおいしく食べさせて、漢字に強い子供に育ててあげてほしいというのが、私の願いです。そのために、私自身も今後とも、力を尽くしていきたいと思っています。

一歳六カ月から小学三年生までを対象に漢字教育を実施

「石井式漢字教育」の普及を目指して設立された「石井式国語教育研究会」では、「石井式能力開発教室」や、通信指導システムの「母と子の漢字教室」を主宰しています。

また、漢字教育を導入している保育園や幼稚園は全国で七百近くを数えるまでになり、これからますます増えることが予想されます。

このことは、園児が喜んで漢字に親しみ、本を読むことが好きになり、ひいては小学校に入学しても、授業に意欲的に臨む傾向にあることが話題を集めるようになっていくことから理解できます。

幼稚園といえば、石井式漢字教育の課外教室（石井式国語教育研究会主宰）のために、園児が帰宅したあとの教室などを提供するケースも増えていきます。これは当初、

子供が卒園したあと、小学校の授業内容にこのような教育システムがないことから、漢字学習を続行したいと希望する卒園生たちの親の声に応える形で実現したものです。

「石井式能力開発教室」は一歳六カ月から小学三年生までを対象に、漢字を通して、子供の国語力の基礎を育てることを目的とした教室です。そこで、「石井式国語教育研究会」の教務主事の責任者である阿賀野栄子先生に、教室の様子を報告していただきます。

漢字を楽しく学ぶことで読書が大好きな子に

石井式国語教育研究会教務主事 阿賀野栄子先生

小学校入学の前後一年ぐらいの間に「石井式能力開発教室」のことを知り、「ぜひ、子供を通わせたいと思うのですが、もう遅いでしょうか」と相談にお見えになる親御さんが少なくありません。それは、すでに幼少のころからこの教室に通っている子供たちの様子を見て興味をもたれたからです。たとえば、幼稚園児が漢字かな交じりの絵本を弟妹に表現豊かに読み聞かせているほのぼのとした姿、新聞を読んでいる一年生、学校での学習に意欲的に取り組む態度など、それらが、幼児期からの漢字教育のたまものであるという話を聞いて問い合わせてこられるのです。

一般的にはまだまだ、幼児期における漢字教育の大切さは十分に浸透していませんから、そのことをわかりやすく説明しますと、「就学前にひらがなと数字だけはし

つまり教えておこうと思ったけれど、漢字までは考えが及ばなかったし、子供にはひらがなより漢字のほうがやさしいということは、それこそ晴天の霹靂（されき）でした」と言って驚かれます。

そこで、当教室では大脳生理学の見地から、丸暗記能力の高い幼児期と、論理的思考能力が育ってくる小学生、それぞれに合わせた指導をしているので、いまからでも十分に間に合うことを伝えると、皆さん、ほっとした顔をなさります。

右脳には漢字を“絵(図形)”を見るのと同じように理解する働きがあるので、その能力が著しい幼少期には苦もなく、漢字を記憶できることを実感してもらえます。漢字を“図形”にとらえれば、ひらがなよりも形が複雑なだけに、覚える手がかりが多く、子供にとって記憶の定着が早いのです。

さらに、ひらがなは音を表す表音文字で、一字一字には何の意味もありません。

ところが漢字は、音と意味を表す表語文字なので、一字一字が具体的な意味内容をもっていますから、その意味でも子供は、漢字のほうがひらがなより興味がもって覚えやすいといえます。

石井式の漢字教育では“目”と“耳”を同時に働かせながら、まず漢字の読み方から学びます。そして、自然に頭の中にその字の形が浮かんでくるようになってから、字を書かせるようにします。つまり、読み書き分離教育で、読み先習を特色とするものです。漢字の学習では、フラッシュカードやゲーム、読みドリルなどを通し、くり返し読むことで、言葉として定着させていきます。

たとえば、フラッシュカードは、先生が漢字を書いたカードを何枚か重ねて持ち、フラッシュが光るように一瞬だけカードを見せながら、次々に読ませていくものです。子供にしてみれば、カードがめくられるスピードに合わせて瞬時のうちに、そして連

続的に読みあげていかなければなりませんから、神経を集中させ、熱中して取り組むこととなります。これは、短時間での反復回数が多く、潜在意識にそれぞれの漢字のイメージが定着しやすいうえに、集中力を高めるのにも効果があります。

「四字熟語」の学習も、“四字熟語のカルタ取り”などゲーム感覚を取り入れた方法を活用することで、楽しみながら、自然に覚えることができます。

また、漢字というのは、論理的、体系的にできた文字ですから、子供の考える力を引き出すばらしい力をもっています。その点に着目し、漢字の成り立ちを説明しながら、子供とともに考えていく解字指導は、当教室の小学生クラスでも重要な指導の一つで、漢字に対する興味をより一層深め、漢字が好きになるのに役立ちます。

教室では単に知識として成り立ちを“教え込む”といった指導法は避け、あくまでも漢字の面白い世界に案内するようにしています。

たとえば「名」という字の成り立ちは“タ”と“口”を合わせてできたものです」と簡単に説明するだけでなく、次のように取り組みます。

——「名前の“名”は“タ”という字と、あとは何の字でできていますか？」「そう、“口”よね。では、どうして、この二つを組み合わせたのでしょうか。まずは子供に考えさせます。そして意見を発表させたあと、次のような話を楽しくしてあげます。

昔は、夕方になると電気もないのもう真っ暗でした。そんなとき、向こうからだれかがやって来る。だれだろうとよく見ても、暗いからわからない。だから、こちら側で「おら、田吾作だ」と口を使って言うと、向こう側で「おらあ、権兵衛だ」と名前を言う習慣がありました。つまり、「名」という漢字は“タ”方に“口”で声を出して名前を呼び合うという意味から、“タ”と“口”が組み合わさって名という字になりました——という具合です。子供たちは楽しくお話を聞きながら、イメージをふくらませていき

ます。

二年生のクラスでこんなことがありました。

教室で、二年生が読本として芥川龍之介の『杜子春』を読んでいたときのことです。貧乏だった杜子春が、不思議な老人のお陰で大金持ちになるというくだりで、『するとこういう噂を聞いて、いままでは路で行き会っても、挨拶さえしなかった友達などが、朝夕遊びにやって来ました』という一節があります。ここを読んだ子供たちの中から、「先生、杜子春のお友達は、本当に薄情だと思います。だって道で会ったのなら、広いから気がつかないこともあると思いますが、路で会ったのなら狭いのに気がつかないはずがないから、貧乏なときは挨拶さえしなかったというのは、本当にひどいと思います」という声があがりました。

いまでは明確に意識されない「道」と「路」の字ですが、本来は「道」の字は、中心となる大きな道を表した字、「路」は、足を使って道と道をつなぐ狭い路の意味があります。解字指導でそんな話を日ごろ聞いている子供たちが、すばらしい読み取りをしてくれたのです。

解字により培われた漢字に対する感性が、読解にまで及び、深い読み取りが行われたのです。

このように漢字の成り立ちを学習していくと、今度は初めての漢字でも、自分なりに分析したり推理を働かせたりして、その意味や読み方を考える能力もついてきます。

漢字が苦もなく読めるようになると、読書の幅が広がり高度な漢字かな交じり文も喜んで読み、覚えた漢字も生きた言葉として理解し、深い認識へとつながっていきます。そして、すぐれた文章をたくさん読むことによって、自然に文章力がつき、話す

カや聞くカも育ってきます。

幼少期は音読をととても喜びます。そして、この音読が黙読の基礎をつくるのです。

こうして読書の楽しさを音読により目と耳で体感した子供は、例外なく本を読むのが大好きになります。

音読ということでは、もう一つの柱として、論語、歌謡、和歌、俳諧、物語、随筆、紀行、漢詩、朗詠など、幅広い分野の古典を教材にしています。

もちろん、古典の教材もすべて、漢字かな交じりで表記しているのです。漢字の意味を糸目にして、全体のイメージをとらえることもある程度は可能です。『小倉百人一首』に、「ももしきや ふるきのきばの しのおにも なおあまりある おかしなりけり」とありますが、「百敷や古き軒端のしのおにも猶あまりある昔なりけり」と漢字かな交じりで表記することで、少なくとも、「ももしき」を下着の“股引き”^もと早とち

りして、全体像を台無しにするようなことは起こらずに済みます。

幼少期の子供は、漢字に対して興味さえもてば吸い取り紙のように吸収しますし、同じことをくり返すのが好きなので、言葉として定着させることも決して難しくはありません。

ただ、大切なことは、くれぐれも教え込むのではなく、漢字カードやかたるた、楽しい解字指導などを通して遊び感覚で興味や関心を引くように導いてあげることです。その結果「漢字」を学ぶことに夢中になり、自然に理解力や集中力、洞察力や創造力も育っていきます。それは、学校の授業でも遺憾なく発揮され、あらゆる学科で学力を高めることになります。

ですから、石井式でも「漢字を教える」のではなく、「漢字で教える」のであり、漢字はあくまで手段であると位置づけられています。

ともあれ、私自身、教室で子供たちが漢字を楽しく学ぶことで、漢字が好きになり、それにともな^{こい}って、語彙が豊かになり、読書が大好きな子供に育っていくのを見ながら、子供の能力を高める漢字教育のすばらしさをあらためて実感する毎日です。

語彙が増えて自己表現力がつく^と情緒が安定する

漢字力がついて語彙が増えると、自分を表現する力がつきますし、頭の中で考えるための言語(内言語)も豊富になるので思考力も高まります。自己表現がスムーズにできれば、情緒が安定し、感性や情操も豊かに育ちます。

「漢字教育を始めると、子供たちの情緒が安定し、とても落ち着いた子になります。それから、何にでも意欲をもって挑戦しようとする姿勢が顕著になって驚かされます」という話をよく聞きますが、その理由の一つには、こうした漢字力によって導かれ

る“自己表現の実現”があると考えられます。

私は保育園や幼稚園での漢字教育を推進してきましたが、そうした園の先生方からも、「漢字教育を始めて一カ月ぐらいたら、園児たちの噛みつき癖がなくなりました」としばしば報告をもらいます。幼い子供たちは何かあると、すぐに噛み付くような行動に出ることが多いようですが、それがなくなるというのです。子供にしてみれば、自分の体のうちに湧きあがった思いのおさめどころがわからなくて、噛み付きという行動で表現しているのでしょう。思いを言葉(内言語)に置き換えることができれば、心が安定し落ち着いていられるのは自然なことです。

昨今、大きな問題になっている「学級崩壊」や「子供の切れやすさ」「非行」などについても、原因はいろいろあるでしょうが、その根源的な原因の一つとしても、この“自己表現不能”な状況を指摘することができます。

そうです、自己表現しようにも、それを可能にする語彙をもたないことが、心の内に行き場のないエネルギーを蓄めることになり、それが暴発するのです。このように考えるのは、当たらずといえども遠からずではないでしょうか。

子供の情緒を安定させ、明るく元気に育てるためにも、今こそ、漢字教育の果たす役割の大きさをもっと認識しなければ、ますます事態は悪化の一途をたどることになると心配されます。

子供は古典の美しい響きやリズム、格調高さが大好き

私は、幼少期に漢字の読みの力をつけ、本を読む楽しさに目覚めることは、一生の財産になると折にふれ、力説しています。ここでもう一つ、読む本の中に、古典を加えることの大切さを声大にしたいと思います。

「古典といわれても、親である私自身、馴染みがありませんし、難しすぎるのではありませんか。かえって、読書の楽しさを損ねるようで心配です」と危惧されるかも知れません。それは、古典に対するゆえなき差別であり、誤解というものです。

古典は難しい言葉が多いからというので遠ざけるのは間違いで、幼少期の子供はむしろ難しいものを喜んで求めています。それに触れるのが楽しいのです。親が古典に馴染みがないのは、文部科学省にも責任あることですが、その“悲劇”を子供に再び味あわせることは避けるべきです。

もちろん、古典といっても、読み聞かせや、朗唱(声をあげて読むこと)により、古典ならではの言葉の美しい響きとリズムを楽しむことを主眼とします。内容を解釈し理解するのは、中学なり、高校なり、その後なり、その勉強に、ふさわしい年齢を待たばいいことです。その場合も、幼少期に古典に親しんでいれば、違和感を感じることなく

意欲的に取り組むことができるはずだ。

作家の林望氏が、東京芸術大学で国語の教員として『平家物語』を朗読する授業をしていたとき、何人もの作曲家たちが、「音楽的で非常に面白い」と言って聴きにきたそうだが、「日本語のリズムというものは実に美しいものだ」と言って感心しきりだったと、鼎談ていだんの中で語っていました。そして、「私はそういうことをもつと感性の豊かな子供も以前からまったく同じ考えを唱えてきているわけです。

ではなぜ、幼少期に、古典の美しい響きやリズムに親しむことが大事なのでしょう
か。

まず、古典を耳と目で楽しむことによって、言葉の感性が磨かれることが挙げられます。次に、解釈をともしなわなだけに、イメージ力を高めます。さらに、古典の文章は格調高い骨組みが基盤となっていることが多いため、人間の深いところで、構成力や構想力、創造力などを育むことになります。

要するに、古典に親しむことは、時代を超えて綿々と生きつづけてきた日本文化に向き合うことであり、日本人としての感性や知性、人間性を磨くことになります。もつといえは、古典に通じること、日本人としての自覚が生まれ、世界観がはつきりするともいえるのです。

それだけに、かつては、古典の朗唱は教育の要として位置づけられていました。

ご存じのとおり、江戸時代の寺子屋では、読み・書き・算盤そろばんが三本柱で、“読み”の時間にはただひたすら声をあげて読んでいたのです。それがあとで、いつの日か、魂の糧、人生の糧になっていくというわけです。

吉田松陰や橋本左内というような人は、三、四歳のころから古典を読み、十歳とも

なれば、すばらしい詩文を作っています。人々は、これを生まれつきの天才という言葉で片付けていますが、彼らは、生まれつき頭がよかったから三、四歳で古典を読めたのではなく、三、四歳という時期に古典を読んだので頭がよくなったのだと思います。

時代が下って、ノーベル物理学賞受賞者の湯川秀樹博士は著書の中で、「四歳のときから、母方の祖父から、四書『大学』、『論語』、『孟子』、『中庸』や『孝経』、『史記列伝』などを素読させられた。中学のころは、『老子』や『莊子』を愛読するようになった。ある日、寝つかれないままに、ふと幼いときに素読した李白の文章が頭に浮かんだ。「それ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり」——これが中間子の発見につながった。この詩が時空と素粒子の相互規定を象徴しているとひらめいたのである……。」と書いています。

湯川氏は、「創造力と記憶力、この二つは反対のもののように思えるが、そうではなく、創造性の発現は、相当大量の、そして相当程度まで系統だった記憶を素地として、はじめて可能なのである」と分析もしています。

くり返しますが、幼少期の子供は、古典の美しい響きやリズム、格調を好みます。この時期に、古典を与えるか与えないかは、親の配慮ひとつにかかっていることをしっかり自覚していただきたいと思います。

もし、お母さんやお父さんが、古典はどれも苦手というのなら、この際、子供といっしょに新たな気持ちで、古典を朗唱してはいかがでしょう。大上段に構えず、日本の美しい言葉の世界を遊ぶ^{こまわ}ぶぐらいの気持ちで楽しめばいいのです。

最初は比較的取っ付きやすい諺^{ことわざ}や俳句、和歌ならば『小倉百人一首』、物語なら『竹取物語』などから始めて、『万葉集』や『古今和歌集』、『伊勢物語』や『源氏物語』、また『漢詩』や『論語』といった作品へと進むことをおすすめします。

具体的な方法としては、初歩の段階にぴったりの諺や俳句、百人一首などは、画用紙などに漢字かな交じりで書き移したものを用意し、まず親が読み、次に子供が読みあげるようにします。また、たとえば一週間で七枚が読めるようになったら、その七枚を使って、かるた遊びなどをするのも一案です。楽しく学ぶ！この姿勢は、古典に対しても心がけたいことです。

画用紙に書くのが面倒という向きには、石井式の「漢字かるた」シリーズの中から、『諺かるた』『俳句漢字かるた遊び』『小倉百人一首』などを利用するといいでしょう。

漢字力・国語力は成功のための第一要件

書物から知識を吸収する力は国語力です。ですから、国語力が、すべての教科学習の原動力、学力向上の推進力になることは周知の事実といえます。

米国の人間工学研究所では大々的な調査を行い、これを統計的に実証しています。調査は、中学生、高校生、大学生から、工場勤務者、大会社幹部、社長クラスまで、実に四十万人の人に対して実施しています。その結果、学生においては、成績の高低が国語の力と正比例していること、また、社会人においても、地位の上下、収入の多少が国語の力と正比例していることが明らかにされたのです。

つまり、「国語力は、学校においても、社会においても、成功のための第一の要件である」ことが証明されたというわけです。

ともあれ、世界の各国で、あらゆる教科の土台になる国語の教育に力を入れている状況があります。たとえば、ドイツでは、小学校低学年の国語の授業時間は全体の半分近くを占め、理科の授業は四年生から始まります。これは、国語の学力をつけること、すなわち教科書の読解力をつけることを優先するためであり、実に合理的なカリ

キラムを実践しているわけです。

ひるがえって、日本の国語教育はどのようになっているのでしょうか。ご承知のとおり、平成十四年度より、学校週五日制が完全に実施されるのにもない、教育過程が大きく変わりますが、国語科については、小学校一年から中学校三年まで全学年にわたり、その授業時間が週当たり一時間、年間で三十五時間も削減されることが決まっています。

それだけでなく、近年、日本の子供の学力低下が懸念されているというのに、ここでまた、国語の授業時間を減少させるのですから、何をかいわんやです。こうした現況を、親として、きちんと把握し、しかるべき対策を講じることが肝心であると思います。

親子や家族で漢字学習を楽しむ

日本の場合、国語力をつけるには、漢字力をつけることがとりわけ重要です。にもかかわらず、学校では、国語科の授業時間が削減されるとともに、その授業内容にも“漢字に力点を置いた基礎固め”といった視点は見られず、このままでは漢字力・国語力をきちんと呼ぶことができるとはとうてい期待できません。その結果、「教科書がまともに読めない」子供を相も変わらず輩出することになり、そして全体的な学力は地滑りの的に低下していくことになるのです。

学校にも、経営上テストの点数にこだわらざるをえない塾にも、漢字力・国語力の真の向上を目指す学習はいまのままでは望めないでしょう。再三再四述べてきたように、小学校低学年までの漢字教育・国語教育は、まずは親の役割だと自覚して取り組んだほうがよいでしょう。

そこで、役立てていただきたいのが、石井式漢字教育法です。家庭で毎日、十分間でも二十分間でも、親子で、あるいは家族で、漢字学習を楽しんでください。「楽しむこと」が成功の秘訣です。

それには、“漢字は楽しいもの”であり、“本を読むのは面白いもの”であることを教えるのが、最大の目的であることを忘れないことです。

石井式漢字教育の具体的な方法については、先の章で紹介した内容を参考にしていただきたいと思います。ここで、最初に取り掛かる際の方法を簡単にまとめておきます。

●身のまわりのものの名前を漢字にする

家の中にある電話、時計、植木鉢、魔法瓶、冷蔵庫、窓、壁、扉など、子供が日ごろからよく目に見ているものに、その名前を漢字で書いた紙を貼ります。そして、会話

の中で、「電話が鳴っているけど、だれからかしらね」「冷蔵庫におやつが入っているわよ」という具合に、できるだけ漢字を意識させるように指差しながら話します。

何度もくり返しているうちに、子供は、「これは電話って読むんだ」「冷蔵庫って読むんだ」と自然と覚えてしまいます。親が何度も、指差しながら読みあげることが大事で、貼りっぱなしでは、あまり効果は期待できません。

●漢字カードを作る

まず、ボール紙のようなやや厚めの紙を、トランプより一回り大きなサイズに切って、カードを作ります。ここに、漢字を太くはっきりと書きます。

カードに書く漢字は、子供にとって身近なものや、興味・関心をもっているものを選ぶようにします。「お父さん」「お母さん」「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」など家族の呼称、「晴れ」「曇り」「雨」「雪」など天気に関するもの、「ご飯」「牛乳」「玉葱」「大根」「苺」「林

「橋」など日常食卓にのぼるもの、「目」「鼻」「口」「耳」「手」「足」など体の部位、「猫」「犬」「馬」「猿」「象」など動物の名前、「桜」「菜の花」「百合」「薔薇」など花の名前というように、何でも結構です。

漢字カードができたなら、カードを見せながら、最初にお母さんがはっきりと声をあげて読み、つづいて、子供に声を出して読ませます。

記憶に留めようとして、カードをじっくり見せる必要はありません。長く見せると、かえって集中力が散漫になってしまいます。始めは一枚からどうぞ。二日目は、まず前日のカードを見せて、「これ、何ていう字だっけ」と聞き、もし正しく読めたら、「よく読めたね」とほめてあげてから、「それじゃ、今日はもう一つ、新しいカードに挑戦しよう」と言っ て前日と同じようにお母さんが先に読み、子供がつづいて読みあげるようにします。

こうして七日間つづけると、前日までの漢字として質問するカードが六枚、新しく覚えるカードが一枚という状態になります。八日目以後は、最初の一枚を除いて、「前日までの漢字として質問するカードが六枚、新しく覚えるカードが一枚」という状態をつづけていきます。つまり、新しい漢字を一日目で覚え、六日間くり返し読んだら、それで「一字卒業」とするのです。

●親子で漢字ゲームを楽しむ

漢字をある程度まで覚えてきたら、漢字ゲームを取り入れるといいでしょう。ゲーム的な要素が入ると、漢字への興味がより一層深まります。家族の団欒だんらんにもびったりで、漢字の学習がますます楽しく、好きになるはず。ここでも大切なのは、親にしても家族にしても、子供のために付き合っているのではなく、自ら、やりたくてやっているのであり、大いに楽しんでいるという姿勢を示すことです。

次に、石井式漢字教育の教室などで行われている「漢字ゲーム」をいくつか紹介してみます。これらを参考に、親子で新しいゲームを考えて、いろいろ試してみるのも楽しいでしょう。

★かるた遊び……普通のかると同じように、漢字カードを表向きに広げ、読み手が読みあげたカードを取っていきます。読み手は、親と子供と交替で担当するようにします。

★お屋さんゲーム……魚、野菜、果物などの名前を漢字で書いたカードを表向きに広げます。「魚屋さん」と言ったら、順番に、魚屋で売っているもののカードを一枚ずつ取っていきます。

★カード抜き……同じ漢字カードを二枚ずつ用意し、その中から一枚だけ抜いておきます。トランプのババ抜きの要領で同じカードを合わせていき、最後に

一枚残ったほうが負けです。

★神経衰弱……同じ漢字カードを二枚ずつ用意します。トランプの神経衰弱と同じ要領で、同じカードを探していきます。

★反対語神経衰弱……「遠いー近い」「高いー低い」「大きいー小さい」など、反対語や対義語となるカードを一組ずつ用意します。「近い」のカードを開いたら、「遠い」のカードを探すようにして遊びます。

★ビンゴゲーム……漢字カード九枚で一組のものを、二組用意します。親と子供でそれぞれ、縦横三枚ずつ、好きなように並べます。先攻と後攻を決め、先攻から順番に一枚ずつ裏返すカードを言い合い、先に縦、横、斜めのいずれかのラインが三枚裏返ったほうが勝ちです。

★パズル……野菜なら野菜とテーマを決めて、野菜の名前を書いた漢字カード

を用意し、それらを^{はきみ}缺で二つに切つてばらばらにしておきます。それを正しく組み合わせさせて再び完成された漢字にします。

●漢字かな交じり文の絵本や読本、古典を音読する

漢字を生きた言葉として定着させるには、名文を読むのがいちばんです。漢字かな交じりで表記された絵本や読本、古典を、いっしょに字面を見ながら、読み聞かせてあげましょう。

そして、子供が漢字を覚えるようになったら、今度は、子供に読んでもらいます。そのあとで必ず、「上手に読んでくれて、ありがとう。面白い本だよね」「読むのがうまくなったね。昔の子供も、こうやって、親につづいて読みあげていたんだよ」などと、ほめるとともに、感想を述べたり、お話ししたりしてください。子供の励みになり、本がますます好きになること受け合いです。

なお、家庭で漢字教育を行うにしても、専門家に指導してもらう時間も欲しいという方には、この石井式を実践する「石井式能力開発教室」や、「母と子の漢字教室 通信指導のコース」などを活用していただくことをおすすめします。

石井式のオリジナル教材を上手に活用

漢字教育の大切さがよくわかったので、早速、わが家でも始めてみようと思うのだが、「漢字カードを作る時間がなかなか取れない」「カードに書く漢字を選ぶのに今一つ自信がもてない」「どんな絵本や読本を読んであげたらいいのか、まして古典はどんなものがあるのか、よくわからない」といったことがネックになって、なかなか踏み切れないという声を聞くことがあります。

そんな場合は、石井式漢字教育の理念に基づいて作られた各種のオリジナル教材

を利用していただくといいでしよう。代表的なものとして、次のような教材があります。

● 石井式漢字教育の教材・教室に関する問い合わせ先

石井式国語教育研究会

〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南 2-18-6-103

フリーダイヤル 0120-11-9511 FAX 03-3760-3590

その後教室は
移転し、電話
番号も変更さ
れています。

● 石井式漢字教育の教材

★【楽しく遊ぶ漢字カード】……子供が日常よく話す言葉の中から、三百字を選び、カードにしてあります。体の部位や動植物の名前、家族の呼称、乗り物や食へ物、身のまわりの道具、街の施設といった名詞をはじめ、「大きい」「熱い」「食へる」「行く」など、

基本的な形容詞や動詞が収録されています。

★【諺かるた】……「鬼の目にも涙」「猿も木から落ちる」など子供たちにも親しみやすい四十四句の諺を集めたユーモラスな版画も楽しいかるたです。

★【俳句漢字かるた遊び】……三大俳人といわれる小林一茶、松尾芭蕉、与謝野蕪村の名句の中から、特に子供が興味をもちそうなもの、四十八句を選んでいます。俳画家・藤原みでい先生の美しい俳画も魅力です。

★【童謡漢字かるた】……「雪やこんこ」など、多くの人に親しまれている童謡の歌詞をかるたにしてあります。生活の歌十六曲、自然の歌十曲、動物の歌九曲、お話の歌八曲、遊びの歌五曲の全四八曲。歌いながら、楽しく遊べます。

★【小倉百人一首】……藤原定家が撰んだ歌仙秀歌集で、日本の優れた古典の一つであり、流麗な言葉の響きを楽しむことができます。漢字学習の効果を高めるために、

読み札、取り札ともに、漢字かな交じり表記になっているオリジナル版です。

★【石井方式・漢字の絵本】……漢字かな交じり文と美しい挿絵からなる絵本です。年少向けの「漢字で遊ぼうシリーズ」、年中向けの「私の漢字の絵本」、年長向けの「花園文庫」と、それぞれ十二巻ずつのシリーズになっています。「花園文庫」は小学生にも十分楽しんでもらえる内容になっています。

★【国語読本】……「蜘蛛の糸」「安寿と厨子王」「ヘリオット先生シリーズ」など日本内外の名作を編集した、十二巻からなる読本です。活字が大きく、また読みが難しいと思われる漢字にはルビが振られていて、読みやすいように工夫されています。

★【朗誦撰】……朗誦するのにふさわしい、記紀歌謡や万葉集撰、小倉百人一首、俳句、諺、そして島崎藤村の「初恋」、宮澤賢治の「雨ニモマケズ」といった詩などを集めています。

★【日本朗誦文学撰】……歌謡、和歌・俳諧、物語・随筆・紀行、漢詩・朗詠の四部構成で編集された朗誦撰です。

★【論語撰集】……儒教の祖、孔子とその弟子たちの問答を集めた『論語』の中から「温故而知新（故きを温めて新しきを知る）」「過猶不及（過ぎたるはなお及ばざるがごとし）」「巧言令色鮮矣仁（巧言令色すくな詳し仁）」など、よく知られた箇所を選んでまとめています。

★【唐詩・五言絶句】……四句からできている漢詩の一体が「絶句」ですが、唐の時代の五言絶句を二十八編集めています。格調高い響きやリズムが楽しめます。